3

美術館における体験型作品の鑑賞支援効果の有用性について

3. 研究ノート - 3

Writer
阿部 美里　ABE Misato
博士前期課程芸術専攻芸術支援領域 1 年

ゴールデンウィーク真っ只中のある美術館でのこと。一級の現代美術作品が並んでいるのに人はまばら。一方その近所にある博物館は満員御礼である。同じ文化施設ながら、この違いはどこから来るのだろうか。一つには「触って楽しめる」という要素が関係するのではないかと考える。博物館では「ハンズ・オン」といった、触れる展示に関する研究が進んでいる。対して、美術館は作品に触れずに静かに鑑賞する場だと思われがちである。果たしてそうであろうか。触れたり体験が出来たりする美術作品が増えつつある中で、これらを鑑賞教育に活用することについて考え、鑑賞の多様性を探っていきたい。

体験型作品とは

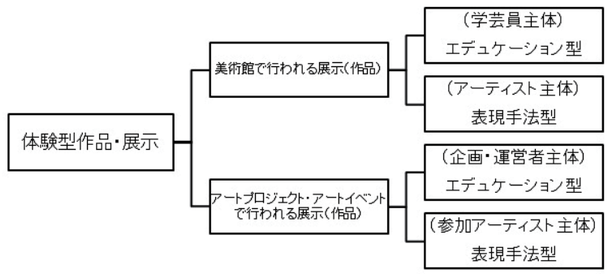
近年、インスタレーションや鑑賞者参加型作品、ワークショップ的要素をもつ作品の展覧会が増えつつある。視覚と触覚など、五感のうち複数の感覚を組み合わせて鑑賞するものや、作品制作の過程に参加する作品をここでは「体験型作品」と定義する。従来型の美術館における作品鑑賞は、絵画や彫刻などを静かに観るという体験がほとんどだった。一方体験型作品の鑑賞では、視覚以外の身体活動を伴う。活発で能動的な印象を与える鑑賞は、アレクサンダー・ドルナーが『〈美術〉を超えて』の中で述べている新しいタイプの美術館のあり方とも合致する。すなわち、伝統的な美術作品を崇拝するのではなく、展示を通して「美術」という概念そのものを明らかにしていくことが鑑賞者には求められている。自ら作品に関わっていくタイプの鑑賞は、鑑賞者に「美術」について考えさせる可能性を秘めている。

どのような作品が体験型と言えるか、具体的な例として、2014 年 7 月 21 日から 8 月 31 日まで東京都現代美術館で行われた「ワンダフルワールド　こどものワクワク、いっしょにたのしもう　みる･はなす、そして発見！の美術展」での様子を紹介する。この展覧会では、主に未就学児とその親が一緒に楽しめる作品を多数展示していた。なかでも船井美佐の作品が印象的で、壁も床も真っ白で広がりのある空間に、森羅万象をモチーフとした作品が配置されている。メインの作品は滑り台となっていて、子どもが楽しんでいる姿が散見された。もしこれらの作品が、「触れてはいけないもの」で「静かに観るもの」であったなら、幼い子どもを連れた親は敬遠しただろう。体験型作品は、美術館に新たな来館者層を生むきっかけになると期待している。

体験型作品のもつ性質

作品や展覧会を調査した中で、活動内容が似ていてもコンセプトが異なる作品が見られ、それらを分析していくといくつかの傾向に分かれることに気が付いた。まず作品が展示される「場」であるが、美術館以外にも横浜トリエンナーレのようなアートプロジェクトやアートイベントでの展示がある。本稿では美術館に対象を絞り、「美術館で行われる展示（作品）」に焦点を置く。美術館においても、企画主体や企画意図によってさらに細かく分類でき、先ほど紹介した東京都現代美術館の展覧会は「エデュケーション型」に分類される。学芸員が作家の表現手法や意図を汲み上げた上で、教育普及的内容に添うようにキュレーションしている。対して表現手法型は作家が主体となり、作家が表現する上での手法として、体験型作品を用いている。2014 年に水戸芸術館現代美術センターで行われた「鈴木康広展『近所の地球』」や、森美術館で行われた「リー・ミンウェイとその関係展」は「表現手法型」に当てはまるだろう。このように作品のコンセプトの違いを明確にした上で、今後は「体験」と「鑑賞」の違いを明らかにしていきたいと考えている。その上で体験型展示がもつ鑑賞支援的側面について示していきたい。

船井美佐≪楽園／境界≫、2014 年、ミクストメディア（東京都現代美術館での展示風景）（2014 年 8 月 22 日撮影）



体験型作品・展示の作品性質分類表

3

小中連携による美術教育の研究

茨城県古河市における調査と実践事例を通して

3. 研究ノート - 4

Writer
光山 明　KOUYAMA Akira
博士前期課程芸術専攻芸術支援領域 1 年

義務教育の 9 年間を一体的にとらえ、小中連携あるいは小中一貫の教育を推進することは、今日における重要な教育課題のひとつである。小学校の図画工作科と中学校の美術科についても、図画工作から美術に接続する一連の学びとしてとらえ、カリキュラムの検討や異校種間の連携を図ることが求められている。こうした問題意識を背景に、小中学校間で連携した美術教育の在り方について研究を進めている。本稿では、私自身の現役教員としての経験も踏まえ、問題を具体化し研究の視点を述べる。

私の中学校での勤務を振り返ってみると、図画工作科の学習でどのような題材に取り組んできたか、どの程度の素材体験をもっているかなどの観点から子どもの実態を把握するという意識をもったことはほとんどなかった。指導では、より専門性の高い教育としての意義を重視するあまり、作品に過剰な完成度を求めることもあった。学校や教室の秩序を保つことを優先し、管理的な側面の強い不自由な授業を行ってしまうこともあった。当時は子どもや学校の実情を踏まえ最善を尽したつもりだったが、今思えば、なんとも息苦しい美術の時間の繰り返しが、美術ぎらいを生み出す一因になっていたのではないかと考えると暗然たる思いになる。子どもの学習歴を考慮し、図画工作科を通じて味わってきた表現の喜びや楽しさの経験を生かしながら中学校の授業を構想するという発想をもっていれば、もう少し違った教育実践ができたかもしれないのである。

一方、小学校図画工作科の指導はどうだろう。授業のねらいを達成するために楽しく活動することは重要だが、「楽しい活動」そのものが授業の目的になっている例も少なくない。また、表現は自由だからという理由で「なにも教えない」といった授業や、逆に内容や手順に至るまで過度に干渉する例も見受けられる。作品展などでは、年齢相応の発達段階が考慮されていない作品もめずらしくない。ここでは、図画工作科における子どもたちの学びをどのように将来に生かしていくのか、そのために現在の児童にどのような手立てが必要かを熟慮する視点が欠けているのである。解決の糸口として、中学校美術科での学びを念頭に置き、子どもの発達を軸に指導計画を見直すなどの改善策が考えられよう。

これまで指摘してきたように、私の研究では、主に実際の教育現場における教員の指導内容や根底にある指導意識に目が向けられる。小中連携や小中一貫教育は、学校制度や教育行政からのアプローチも重要だ。しかし現場の教員やそこで実際に学ぶ子どもたちの姿を抜きにしては根本的な問題解決は図れない。また、地域との結びつきの中で連携教育が形成されるとすれば、連携上の課題も各学校や立地地域の現状に密着したものとしてとらえる必要がある。従って乗り越えるべき問題は、対象地域における個別の教育実践や子どもと教員の相互関係から見出されるべきである。こうした考えに基づいて、研究の中心課題となるのは、私が勤務する茨城県古河市地域の小中学校を対象に、図画工作科や美術科をめぐる問題を小中連携の観点から明らかにし、その解決に向けた方策を提案していくことである。具体的な作業として、市内の 32 校の教員と生徒に対してアンケート調査を実施し、現在その解析を進めているところだ。

また、数年前から地域の教員らで協力して進めている「先生たちの美術展」のプロジェクトは、小中連携による美術教育として具体的な形を現しつつある。これは、古河市を中心とした地域の小中学校教員によるグループ展で、教員の作品展示に加え、美術教育の実現を企図して様々なプログラムが実施されるのが特徴だ。こうした、地域の教員らが独自に連携を模索している取り組みを研究対象に、その成果と課題を分析し共有化する試みも、この分野の研究に新たな貢献をもたらせるのではないかと考えている。

「先生たちの美術展２」より「中学生アートレポーター」の様子。（2014 年 1 月）

「先生たちの美術展３」より「雪の結晶をつくろう」の展示。（2015 年 1 月）